

石徹白の農山村地域づくり

The study for community development of small farm village “Itoshiro” in rural mountain area

柳田 良造

Ryozo YANAGIDA

Abstract

Through the field survey of in rural mountain area in Gujo city, small farm village “Itoshiro”, this study clarifies the community development process of the small farm village from 2004~2015. And more, this study clarifies the important factor of community development of small farm village.

Keyword : 農山村、中山間地域、小集落、地域づくり、石徹白、生活

1. はじめに

石徹白と書いて、「いとしろ」と読む。場所は郡上市白鳥町石徹白、白鳥町から行くと途中、急な道のつづく標高 900 m 檜峠を越え、200 ~ 300 m ほど下ると、別天地のような開けた集落に着く。そこが石徹白集落で、古くから白山信仰の拠点集落として知られ、白山登山の美濃の入口にあたる。縁があり、本学に赴任以降 2009 年から度々訪れている。2011 年には、学生達と、集落の人たちのオーラルヒストリー調査を行い、インタビューのテープおこしを行い、まとめた報告書を作成した。その内容は編集され、「聞き書き集 石徹白の人々 II」として、出版された。

石徹白は人口も 300 人を割り、高齢化率も 40% を超えるなど集落として厳しい状況にあるが、一方ここ 10 年ほどの間に、小水力発電での地域のエネルギー自給への取り組みや、農産品で特色ある開発を行うなど、特色ある地域づくりの成果をあげ、30 歳代の移住者が増えるなど地域づくりで、注目をあびつつもある。2015 には 2 度ほど訪ねる機会があり、特色ある地域づくりの核になっているリーダーの二人（平野彰秀と石徹白秀成）、東日本大震災後川崎市から石徹白に家族で移住した 30 歳代の廣中氏に、ヒヤリングする機会があった。本研究ではこのインタビューを中心に石徹白の特色ある地域づくりがどのように進められてきたのか、その地域づくりの発端と展開過程、今後の課題な

どについて明らかにしたい。

2. 石徹白の概要

石徹白は平安時代から鎌倉時代にかけての白山信仰が盛んな時代には「上り千人、下り千人、宿に千人」と言われるほど修験者の出入りで栄えた土地であり、明治に入るまでは神に仕える人が住む村としてどの藩にも属さず、年貢免除・名字帯刀が許されたところであった。「中世的支配体制」が明治になるまで維持され独特の文化が形成された。特に最奥の「上在所集落」は夏には修験者や白山参詣の道案内と宿坊を営み、冬は「御師」として各地に信仰を広め御札を配ることを生業とする人々の住むところであった。民俗学者の宮本常一の 1937 年（昭和 12）3 月に行われた石徹白調査¹⁾もそういう視点から行われたものであった。

標高 700 メートルの高地にある集落で夏は涼しく、昼夜の温度差により主要農産物であるとうもろこしは糖度が高くなり、評価が高く広く出荷されている。冬は毎年 3 メートルを超える雪が積もり、ウィンタースポーツには絶好のロケーションであり、現在も二つのスキー場が営業している。反面、地域の生活者には厳しい雪国生活が強いられる。1950 年代までは 210 戸 1200 人強の人々が住んでいたが、2007 年度の統計では 117 戸 329 人に減少し、145 人（44%）が 65 歳以上の高齢者と、過疎・高齢化が進んでいる。2013 年度

の住民基本台帳では 268 人まで下がった人口が、2014 年には 273 人になるなど、近年子育て世代の移住により、子供の誕生による人口増も生じている。

3. 平野彰秀氏の履歴と石徹白との係わり

平野彰秀氏は岐阜市出身で、2011 年石徹白への移り住んだ外部からの人材であるが、近年の石徹白地区での地域づくりの活動を企画し、実践しているリーダーの一人である。平野彰秀氏の履歴と石徹白との係わりから、近年の石徹白での地域づくりの展開をひもといていきたい。

平野氏は東京大学都市工学科大学院時代にいろいろ地域に係わったがひとつの場所係わりたと思い始める。2001 年春、修士課程北沢猛研究室修了後、北山総研入所し、2005 年まで 4 年間勤める。収縮後 2001 年秋、秋元祥治（早稲田大学卒 岐阜柳ヶ瀬出身）が立ち上げた G-net（人材育成からまちづくりをめざす）に参加、まちづくり関係のなかまを岐阜に得る。2002 年 G-net に岐阜での地域づくりに活躍する田代、蒲勇介が参加する。2003 年 NPO 法人 G-net で蒲勇介がフリーペーパー「オルガン」発行する。2004 年 4 月 G-net Tokyo の立ち上げに水野馨生里（後に平野と結婚し、現在は平野馨生里）が参加する。2005 年、平野彰秀氏は北山総研退職後、外資系の経営コンサルタント会社のブーズ&カンパニーに入社し、2008 年まで 3 年間勤める。

2007 年、G-net Tokyo とオルガンの共同企画で、水うちわの復活プロジェクト²⁾が行われる。2007 年、蒲勇介呼びかけで「長良川流域持続可能研究会」が立ち上がり、平野彰秀氏も参加。東京の会社に勤めながら、岐阜と行き来し、活動に参加した。長良川流域を持続可能な地域にしていくために、どうしていくかをテーマに活動が始まり、郡上市和良地区の農村に田んぼの手伝いにいった。また郡上八幡での「山と川の学校」で林業体験をやって、長良川上流部の中山間地域の実情を知った。「水うちわ」を復活させるために原料をどこで調達するために竹とか紙を探した。紙は美濃で梳かれ、岐阜で団扇や提灯になる。このように資源的に上流部は重要な地域だが、地域としては危機的な状況にあり、人口が減って耕作放棄地が増えている。

なぜ中山間地域が衰退したかをエネルギーの側面を考えてみよう。平野氏は問題提起した。元々は地域でエネルギーは自給的な暮らしで行われてきた。薪と炭とかを地域まかない、田んぼもみんなで田植えしたり、馬で耕していた。高度成長期になって、田植機が入り、トラクターが入ってきて馬耕もなくなり、みんなで田

植えることもなくなった。そのため石油とうエネルギーを外部から買わなくてはならなくなった。どんどん地域から現金が外に出て行かざるをえなくなっていった。

例えば石徹白では、昭和 30 年代までは地域で水力発電所を運営していて、電気も自賄えてきていた。しかしそれが現在は電力から電気を買わなくてはならない状況になっている。

一方で川とか、水とか森とか、地域の資源は豊富にある。そこで自然資源を活用したエネルギーづくりを進めることによって、中山間地域の復権、自然エネルギーで賄える地域が復活する。地域単位でエネルギーや食料をある程度まかなっていくことができれば、それがグローバルな意味での持続可能社会にもつながっていくという問題意識、農山村が持続可能のためにはエネルギー・食料・お金などの地域内循環が必要との思いになり、2007 年夏郡上市の農村地域を訪れた。そのなかの一つが石徹白であった。郡上のあちこちの地域を歩き、水力発電をやりませんかというキャラバンをおこなった。その時に反応してくれたのが石徹白であった。NPO 法人「地域再生機構」理事長の駒宮博男（平野彰秀はその NPO 法人副理事長）が NPO 法人「やすらぎの里いとしろ」を知っていて、オルガンのメンバー（蒲、平野、水野）で働きかけをしたところ、地元の人と意気投合して水力発電をやろうということになった。

2007 年夏から半年かけて、石徹白に三つ小さな水力発電施設を設置する事業にかかわった。そして、その事業で平野は石徹白に通っているうちに、石徹白がもしろい地域だということを感じるようになった。

平野自身、大学院修士時代からどこかひとつの地域にはいつて、地域づくりをやりたいと考えてきたが、それがここではないかと思うようになった。そこで



図1 移住した平野氏宅

2008年4月に、東京の外資系の経営コンサル会社をやめて岐阜に戻った。

4. NPO 法人やすらぎの里いとしろと小水力発電事業

平野彰秀がNPO 法人の副理事長をつとめる「地域再生機構」理事長の駒宮博男は現在61歳、東京大学理学部物学科中退で世界中の山を登った登山家、高山研究所の研究員を経て、企業の社員の健康診断を行う会社を立ち上げたのち、20年ほど前からいくつかのNPOの活動を始めた。横浜出身で、現在恵那市の農村に居住。平野ら「長良川流域持続可能研究会」がアドバイスを受けることになった駒宮氏と名古屋大学の高野雅夫氏は、ある時期から小水力発電に関心をもっていた。駒宮氏はNPO 法人「地球の未来を考える」で、APバンク（小林武史、坂本龍一ら音楽家が出資し環境保護や自然エネルギー促進事業などをサポートする非営利団体）から融資をうけて「らせん水車」を開発し、実用タイプを作り出していたのである。

石徹白では2003年過疎が進む地域での危機感から地域づくりを考えるNPO 法人「やすらぎの里いとしろ」が誕生し、地域の歴史・文化を後生に伝える活動（歴史勉強会）の他、設立当初はキャンプ場の運営などを手がけていた。NPO 法人「やすらぎの里いとしろ」設立の中心メンバーは石徹白土建会長の石徹白勉さんと石徹白勉さんの妹とご主人の吉田文夫さん夫婦らで、吉田さん事務局を担う。2003年当時、駒宮氏は岐阜NPO センターの理事長代行を担っていて、NPO 法人「やすらぎの里いとしろ」の設立総会に呼ばれて、石徹白とのつながりができた。吉田文夫さん夫婦は、定年まで名古屋に住んでいて、定年後石徹白に家を建て暮らすようになっていた。現在は春、夏、秋は石徹白に居住し、冬は名古屋で暮らす生活をおくっていて、農業

用水に設置されたらせん水車からエネルギーで生活の電気をまかなっている。

NPO 法人「やすらぎの里いとしろ」の活動は小水力発電事業が始まってから、小水力発電が活動の中心になった。しかし、その活動は地域全体の取り組みにはならず、一部の人達がやっている活動との認識が続いた。

5. 地域づくり協議会の誕生と「将来ビジョン」づくり

2007年10月に石徹白勉さんらが中心になって「地域づくり協議会」を誕生する。地域の様々な団体が入り、オール石徹白の地域づくり組織がようやく誕生したが、これは岐阜県が県内の各地に派遣した「まちづくり支援チーム」の石徹白での活動の受け皿のためにつくられた組織ともいえる。石徹白への「まちづくり支援チーム」の派遣は、2007年9月から2009年3月まで1年半で、そのスタートは丁度「地域づくり協議会」が誕生する時期と重なるからである。この「まちづくり支援チーム」を地元ひっぱってきたのも石徹白勉さん（当時、上在所地区の組長）であった。

岐阜県から4人、郡上市から3人のスタッフが月1、2回派遣され、会合を重ね、石徹白地域の「将来ビジョン」をつくる活動が行われた。石徹白秀成のヒヤリングでは、「将来ビジョン」づくりは行政マンのお膳立てで行われたもので、地域にとっては「将来ビジョン」は行政と大学の先生につくってもらったという意識が強いと述べた。その内容もよく把握していないが、しかし、ひとつのスローガンである「30年後も石徹白小学校を残す」はワークショップの中から生まれ、住民の意識として残ったと。

平野さんは2008年4月に岐阜に戻ってきたのち、2008年～2010年の3年間、岐阜の家と石徹白に借りた家を往復する生活のなかで、様々な活動とその後の石徹白移住の準備を行う。その時に石徹白地域の外部の人に対する接し方は、割とオープンだと感じ、移住する決断のひとつとなった。現在はさらにオープンになったと感じる。白山信仰を各に地域交流の歴史があり、オープンな土地柄なのかもしれない。ある意味出身地である岐阜市の方が都市にもかかわらずずっと閉鎖的で、足のひっぱりあいのような地域性を感じると。

2009年3月に「石徹白ビジョン」ができて、2009年夏から「石徹白ビジョン」をつくる活動の事務局が郡上市から地元に移管され、その頃から様々な活動が行われるようになる。事業を行った活動は2つである。

●「新たな公」国交省の助成事業で300万円ソフト事



図2 冬の石徹白集落と山並み

業 平野彰秀が事務局を担う。

●「いきいきまちづくり」岐阜県の助成事業で270～280万円円ハード事業 パンフレットと看板を制作

6. 平野彰秀さんと平野馨生里さんの石徹白移住

2011年から平野さんは、石徹白に定住する。石徹白に定住しようとの思いは、2008年に東京から岐阜に戻った時から決めていた。2008年に水野馨生里さんと結婚するが、当時水野馨生里さんの方が強く、石徹白に移住することを考えていたそうだ。

水野馨生里さんは大学時代に文化人類学を学び、内戦で途絶えていたカンボジアの伝統的織物「クメール織物」の復活プロジェクトに4年間参加した経験がある。手仕事、目に見えてわかりやすい仕事、地域の人達に仕事をつくっていただける場をつくりたいと考え、洋裁学校にかよい始めた。本人はもともと、クラフトやものづくりは苦手なので、企画やデザインのような基本的なところはやり、作業の多くは石徹白の人たちをお願いしていて、「いとしろ洋品店」という地元の農家の衣服づくりの伝統をリメイクしたファッションブランドを立ち上げ、石徹白の自宅の一角にショップを構えている。

衣、食、住では現在「衣」は最も自給から遠いところにあるが、近代化以前は農村では自分達が植物を育て、糸をつくり、布をおり、服を当たり前のようにつくっていた。一番大変な作業だから、最も早く自給から離れ、近代化のなかで最も早く工業化された。日本では富岡製糸工場のように文明開化は織物生産から始まった。トヨタ自動車も豊田自動織機製作所から始まったように、布を制するものが世界を制するような時代があった。



図3 いとしろ洋品店

7. 「将来ビジョンづくり」後の地域づくり協議会

「将来ビジョンづくり」後の事務局を石徹白秀成さん、平野彰秀さんらが「地域づくり協議会」の担うことになるが、活動の進め方の基本は、まず地元の人がやりたいことをやろうということを経をたてようと考えた。

最初にやったことは石徹白の若い人たちで、石徹白の公式 Web ページをつくろうとした。5人が集まり、その中の20代の稲作農家が高校時代にパソコンクラブで、HTMLを書けるので彼を中心に「石徹白人」という Web ページを立ち上げた。

次に平野彰秀さんが以前勤めていた外資系の経営コンサルタント会社が、社会貢献活動の一環で「人口減少の石徹白地域をどう活性化するか」というテーマで地域づくりのコンサルタントに手弁当でやってきてくれた。2009年10月から3人派遣されて、石徹白に2ヶ月間、常駐して5年間の計画（石徹白の再生ロードマップ）を作成してくれた。そこでは地域づくりの活動のスタンスとして、「みんなで楽しくできることから」を提言してくれた。「みんなで」ということは、小さな集落においては、誰かが個人的商売で成功を収めるということではなくて、なるべく大勢の人を巻き込んで取り組むということ。「楽しく」というのは短期的にもうかった、もうかったというかたちではなくて、なによりもやること自体が楽しいということ。「できることから」ということは、補助金に頼りすぎたり、すごく大きなものをいきなりやるのではなく、小さなことから、できるところから取り組んでいこうということ。石徹白のような小さな集落では、「みんなで楽しくできることから」ということが大切なことであるということを提言してくれた。

そのためのパイロットプロジェクトとして、ちょうど地元の女性グループからカフェをやりという声が出てきたので、彼女たちに働きかけをして、立ち上がったのが「くくり姫」の活動である。2009年12月から農村センターで不定期のカフェを始めた。

地域づくり活動の柱として建てたのは「30年後も小学校を存続させよう」というスローガンで、まず石徹白のファンづくりから始めよう。石徹白を知ってもらい、石徹白を知る人を増やそう。次に地域での仕事づくりをして、定住促進のための住む場所の確保を行おう。ファンづくり、仕事づくり（産業雇用の促進）、定住促進のこれら3つのことを経営コンサルタント会社の石徹白提言づくりの中で一緒に考えた。この3本柱と「みんなで楽しくできることから」の方針とカフェ

石徹白の農山村地域づくり

の立ち上げが、経営コンサルタント会社のスタッフ3人の石徹白滞在2ヶ月間の成果となった。

「将来ビジョン」づくり以降の石徹白での具体的な活動をどうやって動かしていったのか、2つの事業（「新たな公」と「いきいきまちづくり」の助成事業）以外、ほとんど具体的なものがなかった中で、経営コンサルタント会社のスタッフ3人の石徹白滞在は、その後の方向性を示す上で重要な契機となった。

スローガンから降りてきた具体的な活動内容として、3本柱を進めていった。たとえばファンづくりでは石徹白の暮らしを体験するプログラムの実践や、産業雇用の創出という面ではカフェと農産物加工場の復活、定住促進ではそのためのWebページをつくった。

8. 農産物加工場の復活と子育て世代の移住

それらをやっていく中で活動も次第に力点が変わっていった。2010、2011年に中心的に力を取り入れて取り組んだのが農産物加工場の復活である。当時自治会で郡上市から指定管理を受けていた農産物加工場が休眠状態で全く使用されておらず、市から取りつぶしも指摘されていた。当時石徹白勉さんが自治会長を担っていて、なんとか復活しようという思いが強くなった。加工場の横の農業用水に水車を設置して水力発電でエネルギーをまかない、加工場を復活する取り組みが始まった。どんな特産品をつくって、販売するか、そこで仕事をつくれるかという取り組みが始まった。2012年に石徹白ふるさと食品加工組合という名前の加工組合が立ち上がって、野菜の低温乾燥の特産品が生まれた。

さらに2012年から子育て世代の移住促進に力をいれるようになり、2012、2013年と子育て世代が移住し

てくるためにWebつくったり、PR活動をしったりした。その背景として、子供の数が減少して、いよいよ抜き差しならない問題になってきたことがあった。小学校の生徒の数が12人だった時代が長らく維持されてきたが、1人転校してさらに2015年3月に5人卒業して、一挙に6人になった。2016年には4人になることがわかっている。2016年には4人になることが認識されたのが2011年頃で、2013年から石徹白小学校で飛び複式というクラスの仕組みになり、3クラスから2クラスになった。飛び複式になると教頭先生や養護の先生がいなくなり、校長と2人のクラス担任の先生だけになるなど、先生の数が減ってしまう事態になる。これはほんとうに危ないという危機感が生まれ、県や市にも働きかけをして、現在は非常勤の先生がひとり午前中来るのと、養護の先生にも特別に来てもらっている。この事態に対し山村留学制度も検討したのだが、山村留学は一時的に子供が来るだけのイメージがあり、また学校を地域づくりの道具に使うのは、いかなものかという意見がでて、結局山村留学の代わりに子育て世代の移住促進を行おうということになった。2015年の保育園の児童は7人である。2人が地元の子供で、5人は移住者の子供である。また2015年は1月に1人生まれ、これから3人子供が生まれる予定で、計4人増える。2016年は小学校の生徒数は4人で底だが今後だんだん増えていって、また10人を超える時代もやってくる。

2008年以降の移住世帯は家族では6世帯、単身が4世帯の計10世帯である。6世帯の家族の内、最初に来たのが元木さんでスキー場に勤めていて、現在3歳の女の子とお婆ちゃんも同居している4人家族。次に2011年に移住したのが元IBMに勤めていた黒木さんで5歳の女の子と奥さんの3人家族で、農業をやっている。さらに静岡から岡本さんが移住し、小学校6年生と中学校1年生の子供がいる父子家庭の3人家族。次が平野さん達で、現在2歳の男の子がいるが、もうすぐ子供が生まれるので4人家族になる予定である。その次がヒヤリングを行った廣中健太（1981年生まれの33歳）さんで、川崎市に住んで農村への移住を模索していたが、2012年に平野さんに東京でのPR活動で会って石徹白への移住を考えるようになった。農村移住の動機は東北大震災以降、原発の放射能のことへの心配と、食やエネルギー等生活の自立性を高めたいこと、子供といる時間を増やしたいことの3つの理由から、首都圏での仕事から離れて田舎に行きたいと考えようになり、2013年4月に地域おこし協力隊として



図4 「地域づくり協議会」の会合

石徹白の農山村地域づくり



図5 石徹白の地理（「石徹白」資料より）

石徹白に移住した。夫婦と子供が4歳と0歳の4人家族で、勤務先は白鳥町の福祉関係の仕事についている。その後が森本さんで、稲倉さんの農業研修募集を知って来て、3歳の子供がいる。稲倉さんは奥さんの実家が石徹白で、移ってきて農業に従事しており、住居は奥さんの実家の土地に新築で建てた。

単身世帯の移住者は地域おこし協力隊できて農産物加工場で働いていた加藤真理子さん、38歳の櫻井さんという父親が石徹白出身で岐阜から移住した男性と50代の金森さんという男性の3世帯である。2015年の5月末、新たに地域おこし協力隊としてやってきた26歳の女性がいる。さらに7月に現在、名古屋を拠点にフリーで広告の仕事とかをやっている夫婦世帯が移住してくる予定で、石徹白移住後もフリーで仕事を続ける予定である。石徹白に移住してきた人のきっかけは様々だが、地域おこし協力隊が3人で数として最も多いし、農産物加工場の活性化など、産業起こしにも着実に成果をあげているといえる。

9. 移住者の住まい確保の苦労

移住者の家は、元木さんと平野さんは取得しているが、他は賃貸で「地域づくり協議会」がその斡旋を行っている。石徹白地区では現在、150軒の家があり、100世帯住んでいて、住んでいない空き家が50軒ある。1/3が空き家である。空き家の50軒について、全軒にアンケートを実施した。全軒、自治会費を払っているの、自治会では連絡先を把握しているが、「地域づくり協議会」にはその情報は公開されずに連絡先がわからない家もあった。その空き家は石徹白出身者の家であったり、別荘であったりするが、そのアンケートでは貸してもよいという家は1軒、売ってもよいという家は2軒しかなかった。アンケート後、個別交渉で貸してくれる家が少しずつ増えてきた。以前は貸してくれる家が全くなかった。農村地域の移住で一番難しいのは意外と家探しである。

移住促進の活動をやっても住むところがないから、移住できないという話になって、対策を講じた。今年（2015年）は空き家改修の予算を郡上市につけてもらって、3軒分改修する計画で、すでに1軒改修済みである。3軒のうち1軒は地域おこし協力隊で来る人用、もう1軒は7月に移住してくる夫婦世帯用で、残りの1軒は、今後移住を予定する人のためのものである。郡上市の空き家改修の予算は1軒当たり300万円であるが、市に働きかけて実現したものである。2015年に石徹白に「冒険の森」というアドベンチャー・アスレチック施設がオープンしたが、そのスタッフ2名が奈良県から単身赴任で来ているが、住むところなくて結局白鳥側に住んでいる。地域にいたい人がいて、仕事もあるのに、住む家なくて移住できないという状況がここ1、2年続いていた。家の問題をなんとかしないと、これ以上移住者を増やせないという状況で、郡上市に強く働きかけたのである。今年改修する3軒は、貸してもいいが家の痛みが激しいという状況のものであった。郡上市の空き家改修の補助金は、地方創成関連の交付金である。郡上市は産業振興公社に3,000万円を渡して、それを基金にして、

石徹白の農山村地域づくり

直しては改修して家賃を改修する仕組みで、3,000 万円で 10 棟、改修する計画である。今年は 3 軒分の予算がつき、郡上市全体を対象に募集があったが、手をあげたのは石徹白だけで、3 軒分の予算を石徹白だけで使うことになったのである。

移住促進の取り組みとして、東京や大阪で PR 活動を行っているが、そういう PR 活動を直接の契機として移住してきた家族はいない。移住促進の PR 活動そのものよりは、石徹白の取り組みについてどこかで情報をえて、それに関心をもち、そこから移住を考え始めるパターンが実は多いように思える。黒木さんは岐阜で農業研修を受けていた時に、その農業の師匠が石徹白で農業をやりたいと言ってきて、最初はその法人で石徹白の土地を借りたいと言ってきたが、「地域づくり協議会」が法人で土地を借りたいというのは了解できないが、個人で移住を前提にしてやって来るのなら、貸してもよいと伝えたところ、黒木さんがそういう条件で移住してきたわけである。黒木さんは特産品としてフルーツほうぎの栽培を行っており、農地も家も借りてやっている。

10. 「地域づくり協議会」の活動の転換

2014 年から「地域づくり協議会」は活動の仕方が転換した。場面場面で試行錯誤しながら、「地域づくり協議会」の運営の仕方を変えてきている。

移住促進は地域の人たちのみんなのそれほどの関心事ではないように、3 本柱の元に柱をつくりその方針のもと活動を行うというよりは、みんながやりたいことをやっていった方がよいのではないかということになった。そこで部会制をつくり活動を進めていくことになった。2014 年にできた部会は、ガヤガヤサロン部会、史跡・名勝の維持管理部会、子育て移住促進部会の 3 部会ができた。2015 年からは石徹白肉漬け研究部会、ツーリズム部会、ペンション大杉活用部会ができた。各部会は毎月第一火曜日に開かれ、それぞれ定例会には 10 人～15 人ほどの参加がある。例えばペンション大杉とは元スキー場の宿泊施設として建てられた建物だが、スキー場の閉鎖後は 2013 年から「地域づくり協議会」で借りている建物で、夏に農産物加工場で働く人や農家で手伝いをするボラバイトの人やインターン生のシェアハウスとして活用を始めている。

地域を将来も存続できるようにという基本的な考え方はそれぞれ、各部会など地域づくりに取り組んでいる人の思いの底にはあるものだと思う。それを端的に表現したものが「30 年後も小学校を存続させよう」と

いうスローガンである。しかしそれは石徹白全体の将来をそういう言葉にかけているとも言えるが、」そうでもない面もある。「地域づくり協議会」も石徹白全体を代表するものにはなっていない面があって、石徹白全体をまかなえる水力発電施設を農協が事業者でつくっているが、農協の理事者達は「地域づくり協議会」に係わっているわけではない。ちなみに石徹白の農協は 1975 年まではあったが消滅して、水力発電事業を行うために 2014 年に再結成されたわけである。

2015 年 6 月 1 日に稼働した「石徹白 1 号用水発電所」は農業用水路と川のあいだの約 50 メートルの落差を利用して発電する。水量は毎秒 0.19 立方メートルで、発電能力は 63kW（キロワット）ある。年間の発電量は 39 万 kWh（キロワット時）を見込んでいる。一般家庭の使用量で、100 世帯強になり、石徹白の世帯数と同じだ。総事業費は 2 億 2300 万円で、国が 50%、岐阜県と郡上市が 25% ずつ負担した。稼働後の運営は郡上市が担当する。発電した電力は固定価格買取制度を通じて売電して、年間に 1300 万円の収益を予定している。今後、さらにもう一台、規模の少し大きいものを設置する予定である。

11. 地域づくりのスローガンとは

現在は休刊しているが、発行されていた「月刊石徹白人」には「30 年後も小学校を存続させよう」というスローガンが書かれていたので、スローガンは地域に浸透しているともいえるが、そうでもない面もあるように思う。

石徹白で山村留学を一時期やろうとしたことがある。しかし地域が山村留学で有名になるとか、有機農業とか、小水力発電で有名になるとか、ひとつのことだけに地域が特化することに抵抗する気持ちがあり、進まなかった。多様性のある地域という気持ちが強い面がある。大きな方向での石徹白に対する思いとか、めざすものは共通のものがあるが、そのためにひとつのことに特化して地域が進むのは、由としない面がある。小学校は象徴的な存在ではあるが、それ自体がテーマな訳ではない。言い換えれば「30 年後も小学校を存続させよう」というスローガンは地域にとって象徴的なものではあるが、しかし小学校を存続させるために山村留学など、小学校存続をターゲットにした地域づくりを進めるのは由としないのである。

またファンづくり、仕事づくり、定住促進の地域づくりの 3 つの柱についても、それにとらわれるのではなく、ある程度推進してきて実績もできた現在では、

石徹白の農山村地域づくり

わいわいがやがや、みんながやりたいことを自由にやる方向にすこしスタンスを変えてきている。部会制にして以降は、どちらかというと多様性を重視している。

昔からここで暮らしていくためには、ここで仕事をつくり、家を建て、水力発電も行い、食べ物をつくり、暮らしを成り立たせてきたわけで、いわば地域づくりを行ってきた。農業水路も明治期に造り、100年以上に渡って維持管理してきている。そういう意味で地域づくりはここ何年間で急に新しく始まったことではない。地域の人たちが、ここで暮らすために一致団結してやってきたことの精神を受け継ぎ、同じものをつくり出していこうということで、「石徹白を将来へとつなぐために」ということが、一番みんなで共有できるテーマである。「30年後も小学校を存続させよう」というのは、そのことを象徴的にわかりやすく言ったものである。

2) 水野馨生里『水うちわをめぐる旅～長良川でつながる地域デザイン』

(提出期日 平成 28 年 1 月 6 日)

12. 平野家の石徹白暮らし

米は自給、畑は時間がなくて十分に手入れできないので、野菜は周りの家からもらうことが多い。石徹白暮らしの生活リズム、TVは見ない。エアコンはない、暖房は薪ストーブを使っている。5時台起きで、朝はみんな早い。移住後、子供が生まれて石徹白での暮らしは子供中心の生活になったが、その生活には満足している。岐阜市には週1回は出かける他、高山や郡上八幡など、週の2～3回は石徹白の外に仕事で出かける。ただし日帰りである。それ以外は石徹白でデスクワークの仕事だが、近年は視察や調査で訪ねてくる人が多く、その対応で時間がかかりとられる。

くくり姫カフェは4月～11月の間、2015年はほぼ毎週末、オープンしている。くくり姫の代表は稲倉さんの奥さん、鉄砲を撃つのは稲倉さんのお父さんで、以前くくり姫カフェで野生動物の料理、出していたこともある。

注

1) 宮本常一『越前石徹白民俗誌』宮本常一著作集第36巻』宮本常一にとっての初めての本格的な調査旅行といえるものが、昭和12年(1937)3月の休日に行った石徹白村の調査であった。当時、宮本常一は30歳で大阪の小学校の教師をしながら休日を利用して民俗調査をおこなっていた。江戸期に無主無従といわれ大名領となったことがほとんどなく、村の組織なども中世的なものが残っていたと言われ、興味をもった。